

映像製作の新しい時代へ。 日活撮影所から生まれた 特機専門会社 NK特機。

特機といえばNK特機。設立から今年で29年。
長く撮影業界を支えてきた歴史ある会社が、いま転換期を迎えている。
取材協力／日活株式会社





1 日活撮影所入り口。調布に撮影所がやってきたのは、昭和29年のこと。2 南さん(左)、江津さん(右) 3 かつての機材倉庫は、今年の春に駐車場に。4 撮影所内にある食堂。昭和30年代から変わらぬ風景。5 メニューもほとんど変わらないとか。6 日活のかつてのNKマーク。

今も昔も変わらない、
特機に求められる感性(センス)。

NK特機(以下、NK)は、撮影業界の裏側を常に支えてきた老舗だ。大型クレーンや移動車、また、送風機や雨ふらしなどの大型機材を使って、映像における特殊効果を生み出す。その専門会社として、ゆるぎない信頼と地位を築いてきた。

はたして、特機とは一体どんな職業なのだろうか。映像における特殊効果を生み出す、とはいっても、映像を作品としてみる一般人にはピンときづらい。

NKに入社して26年になる南好哲(みなみ・よしのり)さんは、「特機にはセンスが必要なんです」ときっぱり言った。機材が高精度化している一方で、仕事の内容や大変さに今も昔もない。関わった映画の種類や場数の影響はあるものの、機材の動かし方や現場で得た知識だけでは超えられない壁がある。「NKに入った頃は、誰もオペレートの仕方など教えてくれませんでしたね。技術は自分で見て盗めと。技術はだれでも持てる。でも、センスは違うんですよね」(南さん)。もうひとり、18歳の頃から特機に携わる江津千秋(こうずちあき)さんはこう言う。「映像をう

まく撮るためのセンスや、現場でのチームワークのセンス。その両方がないとやっていけないでしょうね」。

日活撮影所との深い関係。

NK特機は、日活撮影所で生まれた。言うまでもなく、NKとは、日活のかつてのシンボル、NKマークに由来する。現NK会長の軽部進氏が昭和34年に日活に入社し、撮影効果係として技術を磨いてきた流れを汲む。日活撮影所内に備えられていた移動効果部が原点だ。昭和55年に軽部氏が有限会社NK特機として独立した頃は、まだ撮影所内にオフィスと機材倉庫があった。



撮影所時代に使っていたクレーン。作りが大きく、今のように小さく解体して運ぶことができなかった。

先述の二人がNKに入ったのは、会社として独立し、どんどん人材を採用していた時期。日活ロマンポルノが年間50本も制作されていた80年代でもあり、撮影所内だけでも仕事は相当数あった。加えて、他の映画会社、テレビやCMなど、多くの撮影現場で特機が求められるようになり、仕事の幅も広がっていた頃だ。「忙しくて寝る暇がなかった」という当時は、映画の撮影が入れば、1本につき8～10日ほど拘束され、撮影が終われば1、2日の撮影休暇。その後また切れ目無く次の作品が待っているという多忙な時代だった。

た切れ目無く次の作品が待っているという多忙な時代だった。

「ここには久しぶりに来た」という二人。撮影所内での取材中、すれ違う人たちに相次いで声をかけられる。いまでも現場を共にするスタッフや昔の仕事仲間なのだろう。中には「おっかなかった」という先輩らしき人もいて、「昔の先輩は体も大きくて、怖かったよなあ」とそろって苦笑い。江津さんは、音楽PVの撮影で樹海に入り、そこで「2、3Km先の現場までクレーンを運べ」と先輩に言われたときのことを強烈に覚えている。「当時のクレーンは今みたいに小さく解体できないんですよ。それを、4、5人で持ち上げて運ぶ。特機は現場についてからが仕事なのに、現場につくまでにもうくたくたに疲れているんですよ（笑）」。200キロを超えるクレーンを持ち上げ、加えて15キロほどもある錘も往復して運んだらしい……。「今そんなことやったら若い人がついて来ない（笑）」と続く南さんも、おそらく経験者なのだろう。

軽部会長のご子息で、NK広告宣伝部



調布市にある現在のNK特機。ここへは平成4年に移った。

長の軽部英和さんにとって、子どもの頃ここは絶好の遊び場だった。「レール移動車があってね。兄貴とそれに乗って、撮影所内をぐるぐる回ったりしてた。大人たちが仕事しているのなんか気にも留めず、がむしゃらに遊んでたね(笑)」。楽しくてしょうがなかった、と撮影所時代を振り返る。

新しい時代に求められるNKへ。

当時NKが入っていたオフィスにはいまや照明準備部が入り、機材倉庫だった建物は今年の春解体され、駐車場になっている。撮影所が開設されてまもない昭和30年当時の木造の建物だったそうだ。

撮影に忙殺されながらも、撮影所という大きな“家”の中で、その黄金期を支えてきた。押し迫る時代の流れのなかで、NK自身もまた変化を余儀なくされている。

どんな撮影もマルチに対応できるのがNKの売りでもあるが、やはり歴史の

ぶんだけ映画には強い。映像技術の進化の傍らで、仕事量や質にはそう変化がない特機職人にとって、頼れるのは、現場での自分の感性。南さんが手がけた話題の映画『剣の岳 点の記』(木村大作監督/東映)もそうだ。厳しい自然環境の中で製作年数2年。職人たちがいなければ生まれなかったかもしれない作品だ。南さんは、特機という仕事について、「撮影をしていると、カメラの動きが芝居を壊したりすることもあるんです。スクリーンを見ていて、カメラの動きが気にならないような動きにすることが、特機の大事な仕事」と話す。また、江津さんは、映画製作に携わる面白さをこう語る。「映画用のカメラは、単焦点のレンズを使うので決まったサイズしか出せない。その制約のなかでカメラを効果的に動かすというのは面白いですね。例えば人間の心情を映し出したいときはぐんと前に寄ってみる。そういう動きは特機を使わないとできないわけですから。それ

が映画に関わる楽しさでもありますね」。

すばらしい映像作品の後ろには、鍛錬された職人達の技がある。近年、特機自体も、音楽やCMなど、専門分野が細分化される傾向にあるという。時代の流れを受けながら、今年、NK特機は、前号で取材した同じく特機専門会社K&L(※)と企業合併を予定しているそうだ。熟練されたスタッフを抱えるNK特機の仕事は、これからさらに多様化していくだろう。

スタッフたちが機材のメンテナンスに余念ない現オフィスで、「業界ではかなり珍しい存在」と軽部さんが若い女性スタッフを紹介してくれた。若い人たちの中にも、特機という仕事を選ぶ人が増えているという。彼女もそのなかの一人。気さくなスタッフと言葉を交わしていると、NKの飛躍はまだまだこれから、という感じがした。

NK特機というひとつの時代に幕を閉じ、歴史を背負いながら、また新たに切り拓いていく。合併という選択が、特機業界、ひいては映像業界への、どんな布石となるのか。その将来像を、もう少し探してみたいと思う(次号、NK特機とK&Lの企業合併について、さらに取材を続けます)。



1 最新クレーン「Movie Bird」をメンテナンス。女性スタッフの姿も。2 広告宣伝部長の軽部英和さん。3 現在のNK特機のオフィスにて。



映画『美しい暦』(1963年/森永健次郎監督/日活)撮影風景の一コマ。吉永小百合さんの後ろに、特機のひとつである巨大な送風機が。中央にはNKマークも見える。(写真提供/日活株式会社)

NK特機(エヌ・ケイ特機)

1980年に、軽部進社長(現会長)のもと、日活撮影所内からスタートした特機専門会社。映画、テレビ、コマーシャル、映像一般の特殊撮影効果のための機材の制作・貸出、および同機材オペレーターの派遣事業などで、数多くの映像製作をサポートしてきた老舗。「安全・安心・信頼」の社訓のもと、プロフェッショナルな特機職人が揃う。<http://www.nktokki.com/>

※K&L(ケー・アンド・エル)1991年創業の特機専門会社。主な事業は、映像関連機材の輸出入・販売や、機材レンタル、オペレーター派遣など。NK軽部会長のご長男、進一氏(現エヌケイ特機社長)が社長を務める。